山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）留学結果報告書

山梨大学
成島　未彩

はじめに

私は大学入学当時より長期留学に興味を持ち、英国レスター大学への短期留学に参加したり、大学内での国際交流活動に積極的に参加したりとこれまで多くの国際交流の場を活用しグローバル人材としての能力を培ってきました。その上で、長期留学は自分の目標を達成するために重要な第一歩であると確信し、大村智人材育成基金による支援のもとで実現することができました。この報告書では、留学で得たものを主に学業面、課外面の二項に分けて報告します。

【学業面】

まず、学業面の成果について述べます。学業面では、学術的な英語の習得はもちろんのこと、日本の教育に有用な教授法を学ぶことができたことが第一の成果として挙げられます。

授業では、基本的に数十ページに及ぶ文献の予習が課されており、基礎知識を事前に習得しておくことが授業参加の大前提でした。また、中間・期末試験では論文の提出が課されており、一つの論文に、各十～十五程度の参考文献が必要とされていました。それらをこなすことは、英語学習者の自分にとって労力を要することではありましたが、多くの文献を予習や論文作成のために読むことで、学術的な英語を習得することができました。また、授業の多くが、前半は講義、後半は数十人グループに分かれての討論から構成され、前半の講義で疑問に思ったことや自分の考えを後半の討論で深めていくという流れでした。私は教授の解説をただ理解することで精一杯でしたが、なかには、講義中に数百人を収容する講義室の後列から質問をする学生や、教授の説明の途中で挙手し疑問を投げかける学生もいました。日本では、大学は人生の夏休みとも言われ、私自身も受動的な学びのなかで必要最低限のことを知識として得てきたように思います。しかしこの経験を通して、学びとは、教授から学生へと伝授されるものではないのだと感じました。学びとは、教授から提示された文献や案を知識として蓄え、仲間との討論を通し、自らの意見を確立するものであるのだと思いました。そして、その過程で学びとして習得されていくものであるの

だとわかりました。学期の前半は慣れない授業形態と現地学生の授業参加への意欲の高さに圧倒されていましたが、徐々に現地の授業形態に慣れて自分の意見を述べることができるようになり、半期での学びの密度の濃さを実感することができました。それも、主体的に学ぶ姿勢を持って取り組んでいたための成果であるといえます。オックスフォードブルックス大学（以下 OBU）でのこの経験を活かして、教師という立場に立つ際には、主体的な学びを提供できるような教育を施したいと思います。

次に主な授業科目について述べます。私は教育学、文学の授業を受講しました。

教育学では、教育の目的について学びました。教育の目的は日本では教育基本法により定められており、人格の形成に重きを置いているといえます。人格の定義は様々であり、心理学においては知能性を備えた個人の行動傾向、倫理学においては自律的意思を持った自由意志などとされます。不明瞭な定義でありますが、それを基に学習指導要領では、人間として調和のとれた児童の育成が教育の目的であると定めています。現場ではどうでしょうか。学校が人格の形成を図る場所だという認知は、教師だけでなく児童や保護者の間でも薄く、勉強する場所だという認識の方が一般的でしょう。勉強する場所ゆえに、テストや成績評価があるのです。イギリスではどうでしょうか。イギリスの教育はイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの地域によって異なります。それぞれ特有の教育制度や評価法を持っていますが、特にウェールズは、生徒の評価を数字や点数で行わず、学習過程を評価するティーチャーアセスメントを導入していることで知られています。その評価方法では、児童一人一人とのコミュニケーションの機会が設け、児童の学習状況の改善が期待できます。必死に勉強した過程が考慮されず、結果のみを数字で表されるのは、児童にとって良い評価法だとは言えないのではないかと思いました。教師の利便性ではなく、人格の形成を優先事項として考えるべきだとする日本の教育の目的を念頭に置けばなおさら、今後採用すべき評価方法は歴然です。学習動機に大きな影響を与える評価について考えたように、目的に対する正確な手段が用いられているかをクラス編成や入試制度など、項目別に考え、各国で良いとされるクラスや学校づくりについて学びました。このように、他国の教育について学んだ結果、日本の教育にも取り入れるべき点、日本の教育の強みを理解することができました。判断の基準は国や学校、人それぞれ異なりますが、こ

れまでの経験を経て形成された自己の人格を尊重し、周囲の意見も傾聴しつつより良いクラスや学校づくりに貢献したいと考えます。

英文学の授業では、ハリーポッターや不思議の国のアリスなどオックスフォードに所縁のある児童文学だけでなく、中国やカザフスタンなど世界各国で愛される児童文学を題材として扱いました。小学校実習の外国語活動にて授業導入に有名児童文学を用いた経験から、児童文学が英語学習の動機向上の役割を持つことに関心を持っていました。そのため、文学の授業を受講し、文学の働きについて現地学生と意見を深めることは、文学の授業を受講する第一の目的でした。読書は子どもの成長に大きな影響を与えることは周知のことですが、その影響は想像以上に多岐に渡り様々な場面において活用し得ることを学びました。例えば、地理学習においては、物語の舞台となる地域の風土や文化、人々についての描写が物語にあれば、それは学習者の地理的想像力を養い、その地域への理解を深めることに繋がります。さらに、文学の活用には、電子メディアの普及により乏しくなっている地理的想像力を鍛える効果も期待されます。このように、文学の可能性を見出す多くの学友との交流はとても有意義であり、文学の英語教育への有用性を改めて感じることができる貴重な経験となりました。また、授業では世界で愛され続ける児童文学作品が、世代を超えて子ども達を魅了し続ける秘密についても探りました。誰もが一度は耳にしたことのあるような作品は、子どもにとって親しみがあり、外国語学習に苦手意識を持っている子どもをもその世界へと誘います。その力を利用し、作品から引用した簡単なフレーズや単語を授業の導入として用いることで、外国語としてではなく絵本の中の世界をのぞいているようなそんな楽しい授業をつくることができます。楽しく分かる授業の確立のために、有用的であろうと考えていた文学を活用した授業を今後もつくっていきたいと思います。また、授業を機に世界中の多くの作品を読むきっかけを得たことは、学習単元や子ども達の成長に合った適切な作品を教材として選べることに繋がるだろうと感じました。

【課外面】

課外面での成果としては、イギリスの文化を学び、そして日本の文化に触れてもらうことができたことが挙げられます。主にOBUの日本語学科の生徒との交流で、イギリス文化を現地学生と体験することができたことは、大変貴重な

想い出となりました。イギリス文化の一つであるパブに週末に行ったり、イギリス料理で一番おいしい料理と言われるイングリッシュブレックファストを作ったり、伝統的な日曜日の食事であるサンデーローストをいただいたりと、現地での生活は、毎日が異文化体験の連続で感性が磨かれる日々でした。例えば、日本とは違い土足の境界が入口にないため、部屋で靴を履いたままの人もいれば脱ぐ人もいて、その境界を気にする人はあまりいなかったことが挙げられます。また、食器用洗剤はすすがずに泡が付いたまま乾燥させるのが主流であったり、レストランでは「すみません」と定員さんを呼ばず、注文が決まっていても辛抱強く待つことが礼儀であったりなど、噂で聞いていたようなことの真偽を自分の目で捉えることができました。さらに、同じブリティッシュイングリッシュでもロンドンのアクセントやバーミンガムのアクセントなど地域によって全く異なること、話し方で上流階級か労働者階級化識別できてしまうことなどこちらに来るまで知らなかった気づきがたくさんあり、毎日が学びの連続でした。

日本文化発信の役割としては、日本から浴衣や習字道具を持参して現地学生に体験してもらったり、現地のアジア食料品店でお好み焼きソースやみりん、海苔を調達してお好み焼きや肉じゃが、おにぎりなどの日本食をふるまったりし、計画していたことは概ね実行することができました。今回の留学では、異文化交流の一つの課題として、以前より日本に興味がある学生だけでなく日本に馴染みのない人々にも、日本を発信することを掲げていました。私は五人のフラットメイトとキッチンを共有していたため、食を通して日本を知ってもらおうと考えていました。お好み焼きやうどん、おにぎりや焼きそばなどを振舞ううちに、次第に日本についての興味を持ってもらえるようになり、山梨に行ってみたいと言ってもらえた時には、今回の留学の目標の一つである、山梨の良さを世界に発信するという目標に対する達成感を得ました。そして、実際に彼らが山梨を訪れた際には、山梨の魅力を最大限に伝えるという任務を遂行できるよう、これからも山梨の良さを探求し愛し続けていきたいです。

おわりに

この留学では、今までの人生では経験できないような素晴らしい経験をすることができました。しかし、それらの成果は容易には得られるものではなく、困

難が立ちはだかっていることが多かったように思います。それらの困難は、長期留学を決断した自分への信念と周囲の応援が原動力となり、少しずつ低い壁として捉えられるようになりました。この留学で得た知識や能力、経験は自分だけでは到底得ることのできなかった財産であり、今後は山梨や日本、世界に還元していけるよう励んでいきたいです。